

第六回 諸橋轍次記念 漢字文化理解力検定 解答・解説

【問題Ⅰ】(小計44点)

問1【読み書き】①＝窮屈 ②＝推移 ③＝取捨 ④＝くわ ⑤＝ます

⑥＝精査 ⑦＝適否 ⑧＝禁物 (各2点)

問2【漢字政策】常用漢字 (2点)

問3【漢字政策】イ (2点)

問4【漢字政策】ア (2点)

問5【熟語】ウ (2点)

問6【旧字体】ア (2点)

問7【歴史】エ (2点)

問8【音訓】イ (2点)

問9【熟語】ウ (2点)

問10【歴史】ア (2点)

問11【部首】ウ (2点)

問12【部首】エ (2点)

問13【漢字の意味】エ (2点)

問14【漢字の意味】イ (2点)

問15【諸橋轍次】止軒 (2点)

■解説 問2 昭和五六年内閣告示第一号「常用漢字表」に載る漢字は一九四五字。「当用漢字表」より九五字多い。「猿・渦・靴・稼」など「当用漢字表」にはなかったものが新しく入った。字体では「当用漢字表」の「燈」が「灯」に改められた。「当用漢字表」にあった「膚・盲」の訓読みが削除されたことも、時代を反映したのとして特筆される。二〇一〇年(平成二二)には平成二二年内閣告示第二号「常用漢字表」二二三六字が告示され、一九八一年(昭和五六)告示の「常用漢字表」は廃止された。追加された一九六字の中には「茨・熊・鹿・埼・阪・栃・梨」などがあり、全都道府県名の常用漢字による表記が

ぐには思いつかない。設問の「庄・絵・益」も同様で、いずれも訓読みはない。音読みがあつて訓読みがないのは、漢字が日本に伝わったところ、それに該当する物や概念がなかったことが主な理由。「字」という漢字に訓読みがないのは、日本に固有の文字がなかったことを暗示している。「字」には「あざな」や「あざ」という訓読みがあるとの反論があるかもしれないが、「あざな」も「あざ」も文字の意味ではない。「常用漢字表」の音訓欄を見ると、「庄(アツ)・絵(カイ/エ)・益(エキ/ヤク)」とあるのに対して、「易」は「エキ/イ/やさしい」と訓読みを併記している。「絵」の音読み「エ」は呉音、「カイ」は漢音。「絵」の隣の「会」も「エ」は呉音、「カイ」は漢音。

問9 「哲学」「民権」「理科」は、いずれもわが国で造られた語。「革命」は英語 revolution の訳語と思われがちだが、天命が改まり、王朝が後退するという意味の『易経』から出た語。古来中国では、天子は天命によって天下を治めるもので、その徳が衰えると姓の異なる有徳者に天命がくだり、新しい王朝を建てると考えられた。姓を易え命を革めるので、「易姓革命」という。

問10 第二次世界大戦後の混乱期に、日本語を廃止し、フランス語の採用を提案したのは志賀直哉。志賀は一九四六年(昭和二一)、雑誌「改造」に寄稿した『国語問題』で次のように述べている。(原文は旧字旧仮名)

外国語に不案内な私はフランス語採用を自信を以ていう程、具体的に分っているわけではないが、フランス語を想ったのは、フランスは文化の進んだ国であり、小説を読んで見ても何か日本人と通ずるものがあると思われし、フランスの詩には和歌俳句等の境地と共通するものがあると云われているし、文人達によって或る時、整理された言葉だともいうし、そういう意味で、フランス語が一番よさそうな気がするのである。

問11 『大漢和辞典』では、「術」は「行」と同じく「行(ゆきがまえ)」の部に、「徑・役・往」は「イ(ぎょうにんべん)」の部に分類されている。「行」と「イ」には形・意味ともに共通するところがあるので、両部を合わせて「イ」部とする漢和辞典もある。

問12 「幾」の部首は「ㄠ(いとがしら)。「ㄠ」を部首とするものに「幻・幼・幽」などがある。

可能となった。

問3 常用漢字はあくまでも漢字使用の「目安」であつて、制限、基準、規則などではない。平成二二年内閣告示第二号「常用漢字表」の前文には、「一般の社会生活において現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安を、次の表のように定める。」とある。小中学校で習う漢字は常用漢字二二三六字に限定され、そのうち小学校では「学年別漢字配当表」によって、学年別に学習する漢字が定められている。「配当表」を見ると、二年生に配当されている「話」の隣の「舌」を六年生で習うなど、齟齬もある。

問4 諸橋轍次の「轍」、鮎釣りの「鮎」、函館の「函」は、いずれも「常用漢字表」にない漢字(表外字)であるのに対して、「朕」や「勅」は「常用漢字表」にある。皇室に関する表記に不便を来さないようにという配慮があつたものと推測される。

問5 「喬木・灌木」の一般的な書き換えは「高木・低木」。「灌木」は、ツツジ、ナンテンなどの丈が低く、幹が発達しない木本植物の意。

問6 〈解説〉「藝」と「芸」はもともと別の字。「芸」の音は「ウン」で、訓は「くさぎる(草を刈る)」。「当用漢字字体表」(一九四八年)で「藝」の新字体を「芸」とした結果、意味の異なる漢字が同じ形となった。ちなみに、中国では「藝」の簡体字は「艺」。

問7 日本語表記のために表音文字として用いた漢字を、『万葉集』に多く用いられているところから「万葉仮名」という。「以呂波(いろは)」「孤悲(こひい恋)」の類。「夜露死苦」「愛裸舞優」などの落書きや、漢字の音訓の一部を使つた名付けは、現代の万葉仮名と見ることもできる。「神代文字」は、漢字渡来以前にわが国にあつたとされる文字。江戸時代の国学者平田篤胤(あつたね)など、その存在を強く主張する学者もいたが、現在では否定的な説が一般的である。

問8 「常用漢字表」(二〇一〇年)には、「胃・恩・句・暮」など、音で読み、一字で独立して使われる漢字が多数載っている。たしかにこれらの訓読みはす

問13 「もし、かりに」の意味の「たとい」は、「仮令・縱・縱使」と書く。「例・比喩・譬喩」は、たとえ話の「たとえ」。「たとえば」は「例えば」と書けるが、「例え火の中水の中」と書くのは誤り。なお、例示の「たとえ」も「たとい」の転じた形。

問14 「与野党」の「野」は、「政権に与しない民間の」の意。したがって、正解はイ「在野(民間にある)」。「荒野」は荒れ果てた原野。「粗野」は言動などが荒々しいこと。「分野」は範囲、領域。ちなみに、「与党」は政権に与する政党の意。

問15 諸橋博士は、轍次命名の由来である蘇轍の字「子由」にちなんで、「尚由子」と号していたが、四〇歳頃からは、『莊子』の一節から「止軒」の号を用いるようになった。引用文の大意は、人は流れている水に映しても姿は映らないが、静止している水に照らして見れば、その容貌のよしあしがわかる。心が静虚であれば、自然にまことの姿が感得されるということ。(塚田勝郎)

【問題Ⅱ】(小計20点)

問1【誤字訂正】①＝改↓会 ②＝務↓動 ③＝逐↓逐 (各2点)

問2【熟語の読み】①ウ ②ア ③エ (各2点)

問3【中国古典】ウ (2点)

問4【仏教】エ (2点)

問5【漢字文化史】ウ↓イ↓ア↓エ (完答4点)

■解説 問1 ①「会心」とは、思いや考えにぴったり合うこと。「改心」は、思いや考えを改めること。②「〇〇に務める」は役職・役割に対して、「〇〇に勤める」は職場に対して用いる。③「逐」は、音読み「ちく」。「驅逐」「逐一」のように使う漢字。「遂」は、音読み「すい」、訓読み「つい(に)」「と(げる)」。「遂に」以外では、「完遂」「思いを遂げる」のように使う。

問2 ①ア「寂寞」は、漢音「せきばく」、呉音「じゃくまく」の両方の読み方がある。イ「牧場」は、「ぼくじょう」と読めば音読み、「まきば」と読めば

訓読み。正解のウ「残滓」は、オーソドックスな読み方では「ざんし」と音読みするが、慣用的に「ざんさい」と読まれることもある。エ「羽音」は、「はねおと」とも「はおと」とも読む。どちらも訓読み。②ア「駅前（えきまえ）」が正解。イ「滝行（たきぎょう）」は、一文字目が訓読み、二文字目が音読み。ウ「軒下（のきした）」は、二文字とも訓読み。エ「席順（せきじゅん）」は、二文字とも音読み。「き」で終わる読み方は、音読みと訓読みがまぎらわしく感じられることがあるので、注意。③ア「蝶番（ちょうつがい）」は、音読み「蝶（ちょう）」と訓読みの一種「番（つがい）」に分解できる。「雄と雌を番いにする」が、訓読みの例。イ「常磐」には、「ときわ」「じょうばん」の二つの読み方がある。「ときわ」は、「常（とこ）」と「磐（いわ）」という二つの訓読みに分解できる。「とこ」と「いわ」が結び付いて「ときわ」となった。「じょうばん」は、「常（じょう）」「磐（ばん）」という二つの音読みから成る。ウ「漆喰」は、音読みの「漆（しつ）」と訓読み由来の「喰（くい）」に分解できる。語源的には「石灰」の特殊な音読みに対する当て字。正解のエ「陽炎」は、音読みで「ようえん」と読んでもよいが、一般的には二文字まとめて、陽差しが強いために炎が立ちのぼっているように空気がゆらいで見える現象というところから、「かげろう」と読む。

問3 ウ「柔弱は剛強に勝つ」は、『老子』のことば。

問4 ア「諸行無常」は、あらゆるものごとは一定せずに変化していくという、仏教の世界観。イ「唯我独尊」は、仏教の開祖、釈迦が生まれた時に発したとされることば。自分自身ほど大切なものはないという意味。ウ「自業自得」は、自分の行いの報いは自分で受けることになるということ。「業」は、仏教で、人間の行いを指すことば。正解のエ「優勝劣敗」は、能力の高い者は生き残り、能力の低い者は滅びていくということ。西洋の進化論の考え方を受けて生まれたことば。

問5 アの科挙の開始は、西暦五九八年、隋王朝の時代。イの仏教の中国への伝来時期は、紀元後の一世紀ごろ、後漢王朝の時代とされる。ウの秦王朝による中国の統一は、紀元前二二一年。エの明朝体の誕生時期は、だいたい一六一七世紀ごろ。（田満字二郎）

【問題Ⅳ】（小計15点）

問1 【文字学】ア（五四〇）（3点）

問2 【書体】篆書／小篆（3点）

問3 【六書】エ（形声）（3点）

問4 【字典の注音】戸来（來）切（完答3点）

問5 【注音法】イ（反切法）（3点）

■解説 問1 『説文解字』では、他字の意味上の構成要素となっている字を部（部首）として建てるという原則のもと、五四〇部（部首）が建てられている。問2 『説文解字』では、見出し字が篆書で書かれる。篆書とは、広義には始皇帝の統一以前に秦地方で使われていた書体（大篆）を指すこともあるが、一般には小篆を指す。小篆とは秦の始皇帝が丞相の李斯に命じて作らせた書体で、大篆を省略して作られたと伝わる。

問3 「从A B 聲（A 従う B の聲）」と成り立ちが説明されるのは形声字。A が字の意味領域を、B が発音を示す。

問4・問5 徐鉉の校定した『説文解字』では、字の発音が反切法を用いて記されている。反切法とは、漢字二字を用いて発音を示す方法。例えばA 字について、漢字B とC を用いて「A、BC 切」、或いは「A、BC 反（翻）」という形式で発音が示される。うち、B には、A と声母（語頭子音）が一致する字が、C には韻母（音節から語頭子音を除いた部分。日本語における母音部分）・声調が一致する字が選ばれる。図では「戸来切」と書かれているので「咳」字は日本漢字音で「カイ」（漢音）と読むことがわかる。「咳」字のもともとの意味は「小児の笑ふなり」で、喉に侵入した異物を取り除くための不随意運動である「せき」の意味は、「效」字の通仮によって生じた。アの直音法は同音の一字を用いる発音注記法。ウの読若法は「A、読若B（A は読みて B の若し）」という形式で示される発音注記法。エの系聯法は反切用字を分析させる際に用いる方法。オの声訓法は字の発音をもとに意味や語源を示す方法。（田中郁也）

【問題Ⅲ】（小計15点）

問1 【国字】イ（3点）

問2 【国訓】タラ *「たら」も正解とする。（3点）

問3 【字義】ウ（3点）

問4 【国訓】（1）あきら（める）（2）諦念・諦観（各3点）

■解説 問1 この国字は平安時代の末に「まろぶ」（転ぶ意）として出現し、その後、種々の用法を得るなかで「すべる」として使われるようになった。例えば「地滑り」は「地汙り」とも書く。「一」の部分が倒れたり滑ったりする姿を表している。

問2 木の名のタラ。姓や長野県の小地名などに見られる字。室町時代に現れた会意の国字「鱧」をもとに作られたものと考えられる。

問3 中国の算術書では「秭（し）」だったが、江戸時代の算術書で版を重ねる内に字形が転化して「秤」となり、字体が似た「扨」あたりからの類推により字音も「じよ」となった。国字とされることがあるが、こうした経緯からは慣用音が加わった異体字ともいえる。

問4 「諦」は中国では、明らめる、つまり見極める意だったが、心の中ではつきりさせる点から日本では断念するという意味が生じた。熟語の「諦念」（タイネン・テイネン）も、ひたすらおもう、真理をさとる心といった意味だったが、日本では国訓から「あきら（める）、断念（する）」という語義を派生し、テイネンと読んで今も使われている。「諦観」も同様である。（笹原宏之）

【問題Ⅴ】（小計6点）

問1 【生涯】嘉納治五郎（3点）

問2 【業績】①Ⅱオ ②Ⅱカ ③Ⅱイ（各1点）

■解説 問1 講道館柔道の創設者として有名な嘉納治五郎は、明治二六年（一八九三）東京高等師範学校校長として就任以来、大正九年（一九二〇）まで三期にわたり、通算二三年間その職にあり、学校教育における体育の確立、普通教育完成のための基礎として師範教育を確立した。また、日本最初のI O C（国際オリンピック委員会）委員となり、第二回オリンピックの東京招致（昭和一五年開催予定・昭和一三年開催返上）を成功させた。昭和一三年（一九三八）I O C 総会（カイロ）の帰途、船上にて病没した。諸橋轍次は在学時代にはじまり、附属中学への転任、また中国旅行や留学の実現など、人生の岐路において多大な恩恵を受けた。生涯の恩師として尊敬して慕い、後に嘉納についての講演で「嘉納治五郎校長こそ大丈夫の風格を備えた大教育家であった」と語っている。

問2 『大漢和辞典』の刊行は、昭和一八年（一九四三）第一巻を発刊後、戦局の悪化と終戦により発行中断を余儀なくされる。戦後は、諸橋自身の右目失明、夫人や諸橋を支えてきた友人、協力者たちが亡くなっていく中、孤独感にさいなまれながらも、諸橋を慕う教え子や新たな協力者達とともに、懸命に『大漢和辞典』刊行にむけ歩みだし、昭和三〇年一月第一巻が完成、その後四か年をかけて、昭和三五年五月に全一三巻の完結を見た。この間、延べ約二六万人が事業に携わったとされ、全一三巻の完成を祝う会では、完成を見ることなく死んでしまった人達への感謝の言葉と共に、不足、不備なところもあろうから将来に向け直して欲しいと謙虚に話す諸橋轍次の姿があった。その意を受け、修訂版、語彙索引を加えた修訂版第二版、そして平成一二年（二〇〇〇）に補巻を刊行し、『大漢和辞典』は全一五巻となった。（諸橋轍次記念館）